

「(仮称) こども本の森」基本方針 (案)

令和6年12月
札幌市教育委員会

目次

第1章 基本方針の策定について.....	1
1 策定の背景及び目的.....	1
第2章 これまでの取組・課題と施設の位置付け.....	3
1 子どもの読書活動へのこれまでの取組と課題.....	3
2 施設の位置付けと期待される効果.....	4
3 既存計画における位置付け.....	6
第3章 ヒアリング調査.....	7
1 実施概要.....	7
2 実施結果.....	7
第4章 コンセプト.....	10
第5章 サービスを構築する3つの機能.....	13
1 誘発機能.....	14
2 交流機能.....	15
3 体験機能.....	16
第6章 運営内容.....	18
1 蔵書.....	18
2 利用方法.....	18
3 求められる人材・能力と運営手法.....	19
4 開館準備.....	23
5 寄附金の募集.....	24
第7章 施設諸元.....	25
第8章 今後のスケジュール.....	26
参考資料.....	27
ヒアリング調査.....	27

第1章 基本方針の策定について

1 策定の背景及び目的

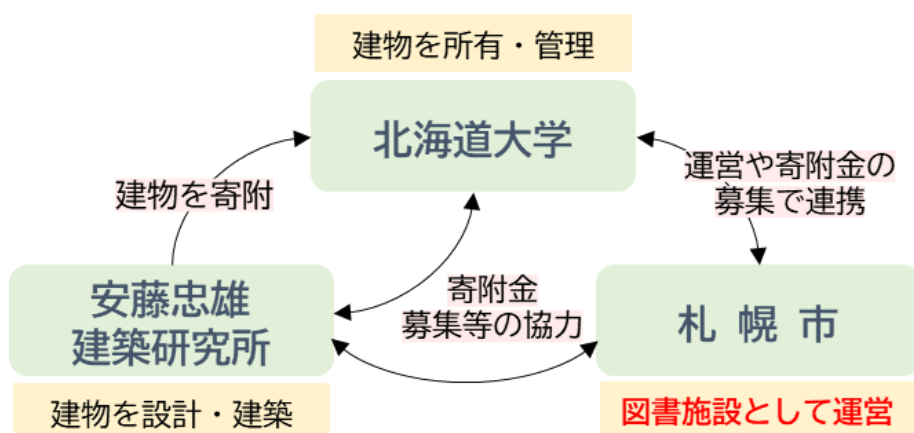
札幌市では、これまで様々な子どもの読書環境の充実に取り組んできましたが、近年は小学校から中学校にかけて不読率が大幅に増加するなど、学齢期における読書離れが課題となっているところです。

こうした状況の中、安藤忠雄氏から北海道大学に対し、子ども向け図書施設「こども本の森」を設計・建築し寄付したいとの提案がありました。

この施設は、子どもの創造力や探求心を養い、未来を担う人材の育成に寄与するものであり、学齢期の読書離れという課題の解決に資すると考えられることから、札幌市は、この施設の運営に参画することとして、令和5年11月7日、株式会社安藤忠雄建築研究所、国立大学法人北海道大学と、「(仮称) こども本の森」に係る基本合意書を締結しました。

この基本合意書では、安藤忠雄建築研究所が「(仮称) こども本の森」を設計・建築し北海道大学に寄附すること、北海道大学が建物を所有・管理すること、札幌市と北海道大学がこの施設を、子ども達が自由に本とふれあい、さまざまな分野の本を読むことにより、読書の楽しさを知り、心の豊かさ、創造力、好奇心を育み、成長の糧となる場として機能することを目的とした施設として運営していくことなどを定めています。

図1 三者の役割分担



本基本方針は上記の基本合意書に基づき、「(仮称) こども本の森」の運営に関する方向性を定めることを目的として策定するものです。

●「こども本の森」とは

「こども本の森」とは、世界的建築家の安藤忠雄氏が、「こどもたちに多様な本を手にとってもらい、無限の想像力や好奇心を育てほしい」「自発的に本の中の言葉や感情、アイデアに触れ、世界には自分と違う人や暮らしがあることを知ってほしい」という思いから、設計・建築費を自ら負担して自治体等へ寄附している子ども向けの図書施設です。

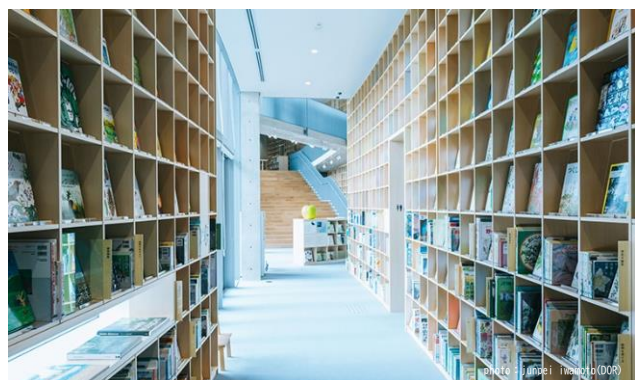
令和6年〇月現在、「こども本の森 中之島」(大阪府大阪市)、「こども本の森 遠野」(岩手県遠野市)、「こども本の森 神戸」(兵庫県神戸市)、「こども本の森 熊本」(熊本県熊本市)の4施設が設置されています。令和7年には愛媛県松山市にも設置される予定で、本施設は全国で6施設目となります。



写真：こども本の森 中之島



写真：こども本の森 遠野



写真：こども本の森 神戸



写真：こども本の森 熊本

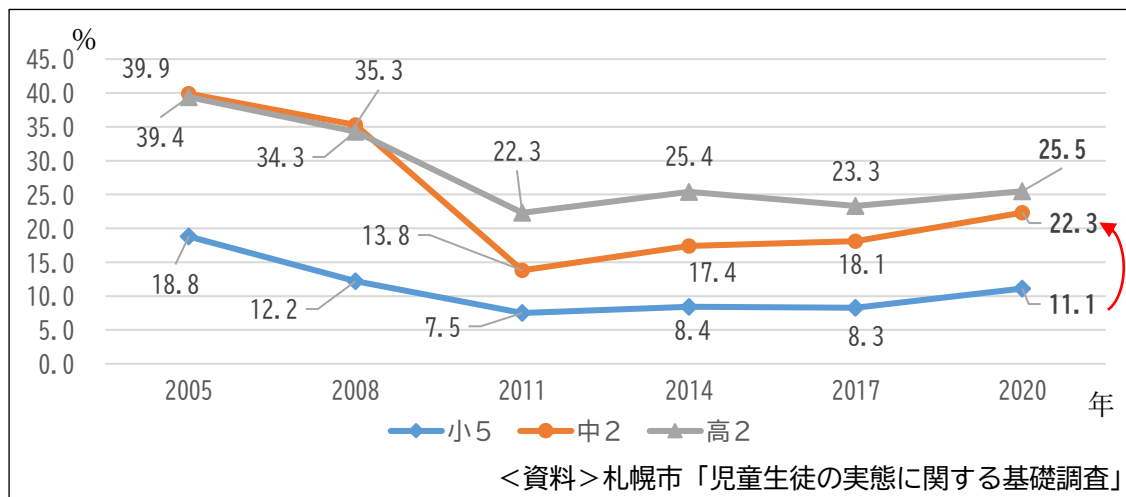
第2章 これまでの取組・課題と施設の位置付け

1 子どもの読書活動へのこれまでの取組と課題

札幌市には中央図書館をはじめとする47の図書施設があり、乳幼児期から本に親しむことを目的とした「えほん図書館」や、仕事や暮らしに関する課題解決のための情報を提供する「図書・情報館」といった、提供するサービスを特化した図書館（機能分館¹）を設置するなど、多様化する市民ニーズに応える図書館づくりを進めるとともに、中央図書館に中高生向け図書コーナー「ティーンズの森」を設置するなど、子どもの読書環境の充実に取り組んできました。

一方で、子どもの読書活動の状況としては、令和2年（2020年）の不読率²は、平成17年（2005年）と比べ、小学5年生で7.7%減、中学2年生で17.6%減、高校2年生で13.9%減と大きく改善してきているものの、教育段階が上がるにつれて読書冊数が減り、不読率が増える傾向が続いており、特に小学校から中学校にかけて不読率が大幅に増加するなど、学齢期における読書離れが課題となっています。

図2 札幌市の児童生徒の不読率の推移



加えて、近年ではデジタルメディアの急速な普及など、子どもを取り巻く情報環境が大きく変化し、これらは子どもの読書環境にも大きな影響を与えている可能性があります。

¹ 機能分館 中央図書館の基幹機能の一部を補完する、機能を特化した図書館。

² 不読率 1か月間に本を1冊も読まなかった子どもの割合。

こうした状況の中で、札幌市ではこれまでも子どもたちの自主的な読書活動ができるきっかけづくりや環境整備に努めてきたところですが、学齢期における読書離れを防ぐために、子どもたちが主体的に読書に対する興味・関心を持てるよう、自主的な読書活動の推進にこれまで以上に取り組んでいく必要があります。

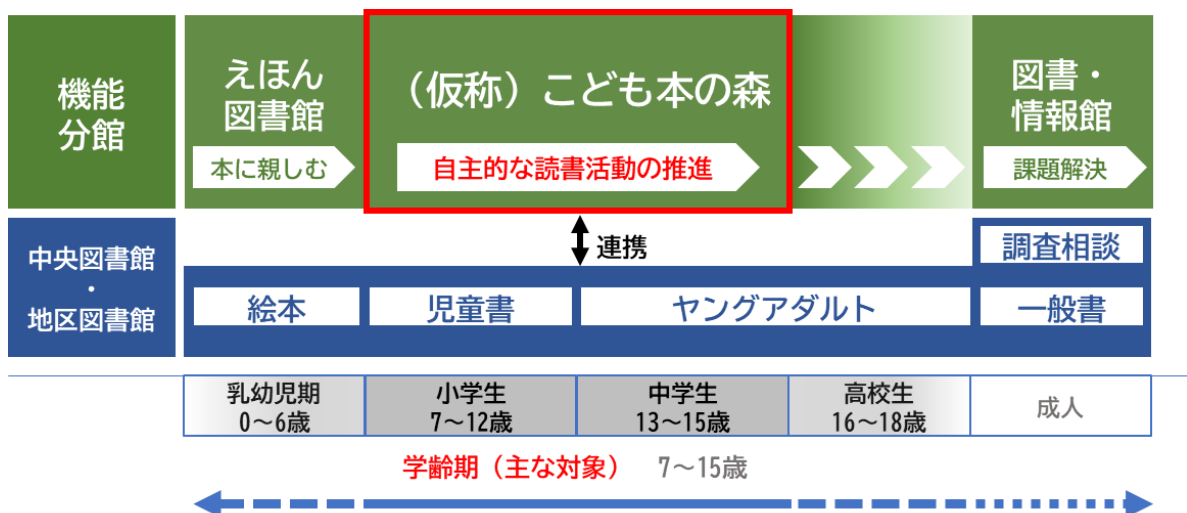
2 施設の位置付けと期待される効果

(1) 施設の位置付け

札幌市が令和2年に実施したアンケート調査³によると、本を読まなかった理由としては、小・中学生では「読みたいと思う本がない」が最も高くなっています。そこで、「(仮称) こども本の森」では、読書離れが進む小・中学生に対して、興味を引くテーマやジャンルの本を提供するなど、様々なジャンルの本に触れて改めて読書の楽しさに気付くきっかけを作り、読書に対する興味・関心を引き出す取組を行います。

また、こうした取組は、子どもから大人までを対象とした総合的な役割を持った既存の図書館よりも、乳幼児を主な対象とした「えほん図書館」や、働く世代を主な対象とした「図書・情報館」のように、対象を絞った機能分館が行うことで、蔵書や提供するサービスに厚みが増し高い効果が期待できるとともに、それぞれに棲み分けが図られます。

図 3 市立図書館内の本施設の位置付け



³ 読書活動についてのアンケート調査（令和2年7月）

そのため、「(仮称) こども本の森」を、これまで札幌市になかった小中学生を主な対象とした新たな市立図書館として設置し、自主的な読書活動の推進を目的とした機能分館と位置付けます。

(2) 期待される効果

本施設を入り口として、市内図書館全体の蔵書を有効活用しながら子どもたちの幅広い興味や関心に応え、継続的な学びの場を作ることが可能となります。また、子どもにとって身近な存在であり、学習活動支援などを目的とした学校図書館とも連携することで、切れ目なく効果的な読書支援を行うことが可能です。これらにより、子どもが様々な機会や場所で読書に親しむ環境を提供し、自主的に読書をする習慣を身に付けることが期待できます。

また、文部科学省の調査研究⁴によると、高校生が本を読まない理由で最も回答割合が高いのは「普段から本を読まないから」であり、本を読む習慣が身についていない生徒が多いことが示されています。このため、小中学生のうちに読書をする習慣を身に付けることは、高校生の自主的な読書活動につながることも期待できます。

さらに、北海道大学の構内に立地するという独自性を活かし、大学の有する知見や人材との連携により、学びの楽しさや奥深さを伝えるなど、図書館だけではなしえない知識や学びの広がりなどの付加価値の創造も期待されます。

これらの取組により、子どもの創造力や探求心を養い、未来を担う人材の育成に寄与することができると考えられます。

なお、これらは寄附者の安藤忠雄氏の「こどもたちに多様な本を手にとってもらい、無限の想像力や好奇心を育てほしい」「自発的に本の中の言葉や感情、アイデアに触れ、世界には自分と違う人や暮らしがあることを知ってほしい」という思いにも沿うものです。

また、北海道大学が制定した「HU VISION 2030」の基本方針「社会との共創」のビジョンに示された「豊かな人生の実現に役立つ生涯学習機能を充実させると

⁴ 高校生の読書に関する意識等調査報告書（平成 27 年 3 月）

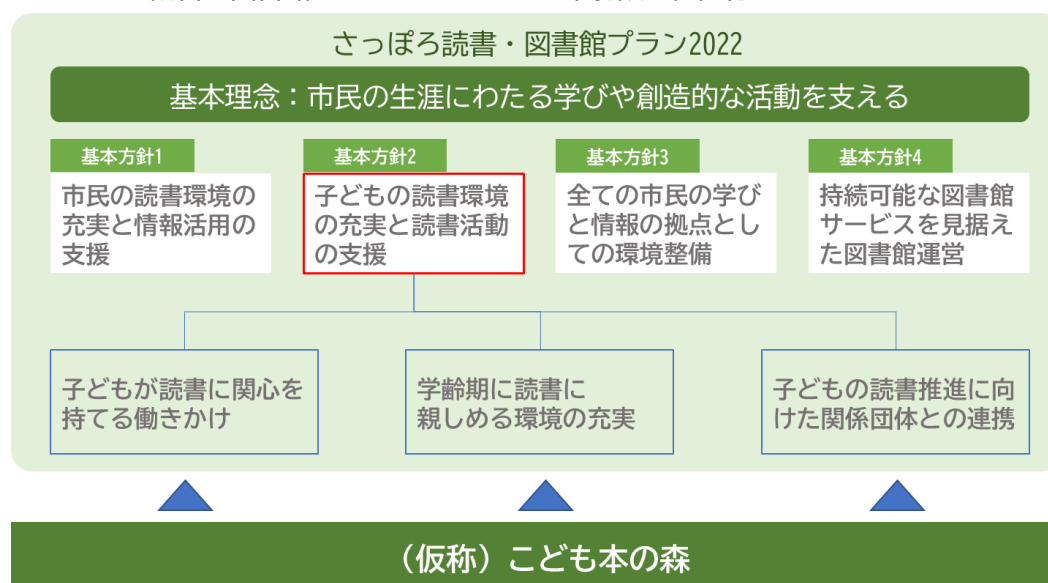
ともに、大学の社会資産を活用して、幅広い年齢層を対象とした地域交流、社会連携等に資する取組を実施し、地域と社会の活性化を推進する」に合致しており、このビジョンを具現化する取組と考えられます。

3 既存計画における位置付け

札幌市は令和4年度に「さっぽろ読書・図書館プラン2022」を策定し、基本理念を「市民の生涯にわたる学びや創造的な活動を支える」と決めました。同プランでは、平成27年に策定した「第3次子ども読書プラン」における成果と課題も踏まえて、基本理念を実現するための4つの基本方針の1つとして「子どもの読書環境の充実と読書活動の支援」を掲げています。

この基本方針に基づいて、札幌市は、あらゆる機会・場所で子どもが読書に親しむ環境をつくることや、発達段階ごとに効果的な読書支援に取り組むこととしており、本施設はこれらの取組を強化するものと位置付けます。

図4 さっぽろ読書・図書館プラン2022における本施設の位置付け



第3章 ヒアリング調査

1 実施概要

運営の方向性を定めるに当たっては、コンセプトやサービス、運営内容を具体化していく必要があります。そこで、「(仮称) こども本の森」に対するニーズや読書傾向等の把握のため、想定される施設利用者、施設関係者、先行施設、有識者にヒアリング調査を実施しました。ヒアリング対象者は以下のとおりです。

表 1：ヒアリング対象者

(1) 施設利用者	小学生、中学生、高校生、一般の方 計 19 名
(2) 施設関係者	北海道大学の関係者 10 名
	北海道大学の学生 計 21 名
(3) 先行施設	こども本の森(中之島、神戸) 館長 2 名
	こども本の森立ち上げ経験者 2 名
(4) 有識者	中島さち子氏(株式会社steAm 代表取締役)・鈴鹿剛氏(四国大学)
	北海道教育大学連携事業関係者(大日本印刷株式会社)
	山内佑輔氏(VIVISTOP NITOBE)
	有山裕美子氏(滋賀文教短期大学)
	鎌倉てらこや(全国てらこやネットワーク)

施設利用者や、北海道大学の学生からは、本施設に期待することについての率直な意見や具体的な取組のアイデアを聞くことができました。また、先行施設や有識者からは、それぞれの経験や専門、活動の背景や考え方、運営のノウハウなど、貴重な知見や助言が得られました。

2 実施結果

ヒアリングでは、対象者それぞれの立場から本施設に望むことを聞き取りましたが、類似した内容も多く見られました。本施設に求められていることや主な意見について、次のようにまとめます。各ヒアリングの実施概要、実施結果は巻末の参考資料に記載します。

「(仮称) こども本の森」に求められること

新たな興味を引き出す本と出会う

- ・自分が知らない世界、新しい視点を得られるようになると良い。
- ・ジャンルを横断的にすることで、今まで興味をもっていなかったところを知りたい。
- ・読みたい本が分からなくなる時がある。そういう人に向けて好きな本が選べる場所になると良い。
- ・本が年齢で区切られていないのが良い。

※本を手にとりたくなるきっかけとして、タイトルの面白さ、表紙のビジュアルの良さが誘発点となる様子が顕著に見られた。

本と出会うことによって成長する

- ・小さな頃から知識に触れ、成長して行き詰った時にも助けてくれることを知ってほしい。
- ・受験で視野が狭まる前に、哲学など、教養について学べる、そういう教育が図書館にあると良い。
- ・子どもがわくわく感を持てる本があると良い。大人向けや洋書でも、少し難しかったという印象を残し、大人になったときにまたその本に出会うことができる。

学び舎の中にあることで様々な文化や知識に触れられる

- ・世界を旅するように、いろんな時代や世界観にぐっと入り込めると良い。
- ・外国にルーツを持つ子どもも多い。洋書をまとめて一箇所に置かずバラバラに置けば、子ども同士が触れあい、ことばの壁を超えられる。
- ・絵本など、子どもが自分でものをつくり、誰かの手に取ってもらえる経験ができる。
- ・読み聞かせができる機械、本と音楽や映像との融合など、テクノロジーを活かして本に興味を持ってもらおうと良い。
- ・今後は分からないが、唯一の大学の中の「こども本の森」になる可能性がある。研究とともに、グローバルな様々な言語が飛び交う、その中で子どもたちが学べる空間を小さな頃に味わえる場所になってほしい。

子どもも大人も一緒に学び合う

- ・子どもたちを子ども扱いしないこと、大学院生が子どもから学ぶことも多くある。
- ・子どもたちを大人と同じパートナーとすること。短期で結果を出そうとせず、子どもとの共創は時間がかかることという覚悟を持つことが必要。
- ・子どもに対して教えるのではなくアイデアを肯定し、様々なことを一緒に楽しめるなど、大人は伴走者としての役割やメンター⁵の精神が大事。
- ・運営側も含めて、まずはやってみることが大事。失敗等のその場の偶然性を許容できるようになる。

多様な過ごし方のできる読書環境がある

- ・本のあるスペースと読むスペースが分かれているのではなく、境界を曖昧にしてほしい。
- ・靴を脱いでごろごろできるスペースが欲しい。
- ・広いところと自分の世界に没入するスペースがあると良い。
- ・おしゃべりできる、複数人で過ごせる等、多様な過ごし方ができると良い。

自然豊かな環境を活かす

- ・北大の中は自然が多いので、明るく自然光が入る広いところがあると良い。
- ・自然があるので、屋外でのイベントや読み聞かせ、中と外との連動性があると良い。
- ・自然豊かな場所で、セミやリスなどの生き物もいるので、活かせると良い。

⁵ メンター 支援者、助言者

第4章 コンセプト

第2章で整理した課題や本施設の位置づけ、第3章のヒアリング調査において得られた意見や要望を踏まえ、「(仮称) こども本の森」のコンセプトを以下のとおりとし、またコンセプトに基づく3つの方針を定めます。

「(仮称) こども本の森」のコンセプト

こどもに知をひらく

「(仮称) こども本の森」は、大学の中にある子どものための図書館として、
そこにある知を子どもたちにひらくこと、
また、本との出会いを通して知と未知の扉をひらくことで、
新たな学びと創造の世界へといざないます。

コンセプトに基づく3つの方針

本との出会いから、世界への好奇心と想像・創造力を育む

多種多様な知や人とつながり、学びを深める

魅力ある空間や豊かな自然の中で、読書に没入する

本との出会いから、世界への好奇心と想像・創造力を育む

本施設では、本を読む子どもも、普段読まない子どもも、好奇心のままに自然に本を手に取り、特別な時間と体験が得られる空間を目指します。そして、子どもが成長し、大人になってからも魅力的と思える本と出会う場ともなります。そのために年齢やジャンル、国を超えた本を収集し、様々な本との出会いのきっかけを作ります。

こうした本との出会いは、その人が見たことのない世界に触れること、興味や知識の広がり、自身の成長を促し、想像力や創造力を育むことにつながります。

多種多様な知や人とつながり、学びを深める

本施設は、北海道大学という学び舎の中にできます。歴史ある学びの場、世界的にもトップレベルで最先端の研究が行われている場において、子どもたちに、学ぶこと、研究の楽しさや奥深さに触れてもらえるよう、多種多様な知とのつながりをつくりまします。大学や附属図書館、各研究施設との連携や、子どもと大学がつながる仕組みなど、この地にできる図書館ならではの学びを創出します。

また、大学という場所には様々な知識や情報だけでなく、異なるバックグラウンドや専門分野を持つ人が集まっています。こうした人々と触れあうことそのものが、子どもたちの成長の機会にもなります。大学生や大学院生など、大人よりも子どもに近い存在である人と交流することで、子どもたちと大学生が一緒に学びを深めていくことに寄与します。

魅力ある空間や豊かな自然の中で、読書に没入する

壁一面に本のある空間が作られ、まさに本の森が体感できる魅力的な建築に加え、本施設は豊かな自然に包まれています。こうした、五感を使って感じることができる、環境や場所の力は、子どもたちの感性や想像力を豊かにします。

施設内における多様な読書空間だけでなく、屋外で自然を感じながら本に親しむことや、自然を活かした体験により、施設の中と外の連動性をつくることで、子どもたちに形式ばらない読書の楽しみを実感してもらい、次なる一冊への没入をもたらします。

これら3つの方針によりもたらされる学びや体験は、子どもたちのその後の人生において、自ら考え、正解のないものに取り組むときの手がかりとなります。

一方、学んでほしい、体験してほしいという思いから、大人から何かを一方向的に提供することは、子どもたちの自発的な学びに繋がらない可能性があるため、3つの方針におけるいずれの場面においても、子どもを子ども扱いしないことが重要となります。これを、本の選び方や見せ方、学びにつながる事業など、この図書館で起こるあらゆることに通底する考え方とします。

第5章 サービスを構築する3つの機能

第4章で定めたコンセプトと3つの方針を実現するため、以下の3つの機能を検討します。

- ・新たな本との出会いを促す誘発機能
- ・多種多様な知や人とつながる交流機能
- ・空間や自然などを感じながら様々なことが学べる体験機能

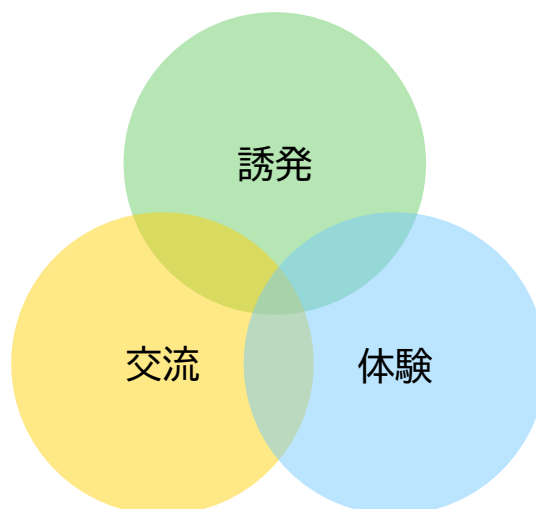
これら3つを柱として、北海道大学の構内に立地するという独自性も活かした「(仮称) こども本の森」におけるサービスを構築します。各機能が相互に連携することで、一体的に学びを深め、子どもの読書への関心を高めていきます。

コンセプトに基づく3つの方針

本との出会いから、世界への好奇心と想像・創造力を育む
多種多様な知や人とつながり、学びを深める
魅力ある空間や豊かな自然の中で、読書に没入する



コンセプト実現のための3つの機能



1 誘発機能

(1) 選書・配架

本施設は、子どもたちが普段手にする機会の少ない本との新たな出会いを促し、子どもの自由な感性や好奇心のままに本を手にとることのできる場所です。

そのため、同じテーマの中に、絵本、図鑑、文学、画集、外国語の本などを並列に並べ、大人が読む本も含みながら、テーマに沿った多様な本を選書し、配架します。

ヒアリングでは、ビジュアルで内容が伝わる写真集、自身では気軽に購入できない本、学校の授業で教わらないことや人生に行き詰まった時にヒントが得られる本を置いてほしいという意見や、自然についての知識が得られる、地域の歴史を知ることが出来る、大学と連携するという、この場所ならではの意見がありました。

本施設ではこうした需要や特性も考慮し、選書を行います。また、北海道大学附属図書館や学生、研究者によるお勧めの本なども選書、配架することを検討します。

そして、今回のヒアリングで得られた視点に留まらず、開館後も時代や文化の変化を的確に把握し、様々な本やジャンルを通して新たな出会いを提案していきます。

(2) テーマとして添えられる言葉の吟味

選書テーマの名称設定は、利用者の目線に立ちながら設定を行います。汎用性のある言葉で NDC（日本十進分類法）をベースとしたオリジナルの分類をつくるなど、分かりやすく利用者に伝えます。

テーマ名の例

大テーマ | 自然

中テーマ | 素敵な数学

小テーマ | 数学者からの風景

ヒアリングからは、本棚を通して大学の各学部・学問への繋がりを表すことも、子どもの好奇心や知識欲を刺激することに寄与するのではないかという意見が寄せられました。北海道大学の学部とリンクするジャンル分けも加えるなども検討します。

(3) 「気が付いたら本を読んでいた」をもたらす環境の創出

時間の奪い合いが激しい現代社会では、「手に取る」「読み進める」という2つのハードルを越えなければ、新しい本との出会いを促すことが難しい状態です。そのため、どのように来館者に本の中の世界に触れてもらうのか、どのようにきっかけをつくるのが重要です。本を身近に感じられ、様々な本に興味を持ち、「気が付いたら本を読んでいた」という瞬間を創り出すための下記のような環境整備を検討します。

【本と出会うきっかけをつくる環境整備】

- ・訪れたいくなる素晴らしい建築や周辺環境
- ・魅力的な本棚、視覚に訴えかける配架方法、手に取りたいと思う美しさの創出
- ・テーマを分かりやすく伝えるサインの掲出
- ・施設内での様々な読書環境の創出や、家具の工夫
- ・本の中の印象的な言葉の掲出など、本そのものの魅力を伝える工夫
- ・先端のテクノロジーを用いた新たな本との出会い等
- ・遊びを通して気づきを誘発する仕掛け

2 交流機能

(1) 大学に集まる多様な人との交流機能

北海道大学の有する多種多様な知や人とつながるため、子どもたちと大学、そこに集う学生を結ぶ交流機能を持たせます。

子どもたちに大学という学び舎を存分に感じてもらうことができるよう、大学施設内を見学できるプログラムの実施や、大学で行われている研究成果発表の場として施設を活用する、施設内で公開授業を実施するなど、大学と連携したプログラムの実施を検討します。

また、大学生が気軽に訪れやすい施設にすることで、子どもが大学生と触れあえる、大学生も子どもと学びあえるなど、知との触れあいや学びあいの交流を創出します。

そして、開館準備の段階から、配架作業等で施設づくりに参加する機会を設けることなども、本施設と大学生を繋ぐ一つの方法であると考えます。

交流機能を実現するための大学との連携は、継続的な運用が必要です。運営側も連携担当スタッフを配置するなどの組織体制づくりや、学生が運営に参画する仕組みの検討など、他の大学との連携も視野に入れながら、ともに施設をつくっていきます。

(2) 市立図書館・学校との連携の場

本施設で本と出会い、それがきっかけで読書の魅力を知った後、日常でも読書に親しむ時間をつくる、その習慣化の促進のために、より身近な存在である市立図書館や学校との連携が必要です。

そのため本施設と、中央図書館や地区図書館などの他の市立図書館とのネットワークを構築し、本施設での企画選書や棚づくりの共有や、入れ替えが必要になった図書の移管などを検討していきます。

また学校と連携し、本施設を児童生徒の校外学習の場として活用してもらえよう、学校等の団体訪問を受け入れる取組などを検討し、本の新たな魅力に触れる機会を創出します。

市立図書館や学校と、本施設での取組も含めて連携を図ることで、児童生徒に向けたサービスにおけるさらなる新しい観点や発想のきっかけをつくり、サービス向上に貢献します。

3 体験機能

(1) 自然を活かした体験機能

施設の周りにある豊かな自然を活かして、子どもたちが様々なことを感じ、学ぶことのできる体験機能を持たせます。本を施設の外に持ち出し、大学構内の自然に囲まれながら読書をしたり、植物、虫、動物の自然観察など、子どもたちが五感全てを使って自然を感じる体験を通して、読書の楽しみを実感し、また本が読みたくなる環境づくりを検討します。

(2) 学びのプログラム

交流機能・体験機能を実現し、子どもたちが自然や北海道大学の多種多様な知に触れ、体験できる機会を総合的に推進する取組として、「学びのプログラム」の実施を検討します。

北海道大学が有する自然環境や総合博物館などの施設、知見や人材に合わせて、ワークショップや科学実験など、施設の内外を活用したプログラムを行うことにより、もっと知りたい、やってみたいという好奇心を刺激し、子どもたちがわくわくしながら学べること、大学生や大人も含め、ともに学びあえることを目指します。さらに、各プログラムのテーマや、そこから派生する事柄を抽出し、関連展示の実施やブックリストの作成を通じて、学びを深めます。

このように、様々な資源や人が携わることで、広く多くの方の利用を誘発し交流を促すとともに、子どもたちが実際に、楽しみながら様々な体験や創造ができる場をつくります。

図 5 学びのプログラムのイメージと内容例

×月×日(月)15:00～17:00 火のおこし方	×月×日(土)13:00～15:00 ミステリー作品 読書会	×月×日(水)11:00～12:00 ハイブリットロケット 打ち上げ実験	「虫と野菜の関係」レクチャー&実践 ●殺虫剤や化学肥料を使わず、昆虫と野菜が助けあいながら成長して、菜園に恵みをもたらす方法などをレクチャーし、その共存共栄を専用の農園で実践 ●こどものにわ、畑（農学部との連携、自然が体験できる庭や野菜づくり）等
×月×日(木)16:00～17:00 土壌について学ぶ	×月×日(火)11:00～12:00 ラブレターの書き方	×月×日(土)13:00～15:00 くまの生態を知る	
×月×日(日)13:00～15:00 虫と野菜の関係	×月×日(月)13:00～15:00 定規とコンパスで 挑む数学	×月×日(日)9:00～12:00 チーズを作る	

こうした交流機能・体験機能を継続していくためには、大学生に運営やイベントの企画・開催に携わってもらうことが必要であることから、研究フィールドとして施設を活用できるなど、大学生にとってのメリットを生み出しながら、北海道大学と連携して取り組んでいきます。

第6章 運営内容

第5章に記載した、サービスを構築する3つの機能を実現するため、次のとおり「(仮称) こども本の森」の具体的な運営内容を検討しまとめます。

1 蔵書

これまでつくられた「こども本の森」は、約1万冊から2万冊程度の本を所蔵しています。図書館としてはそれほど多くない蔵書数ですが、一冊一冊の魅力を惹きだす見せ方や、壁一面に本の表紙を見せた誰もが目を惹く配架（面陳）により、圧倒的な本の世界に囲まれる体験を創出しています。

また、自然と本を手に取りたくなるストーリー性のあるオリジナルの分類や、それに伴った厳選された棚の編集を行うためには、量ではなく質的な充実が必要となります。

本施設においても、この考え方のもと、1.5万冊程度の中で設計内容と調整しながら蔵書数の検討を進めていきます。また、図書の収集にあたっては、購入だけでなく、広く本の寄贈を呼び掛けます。

なお、施設を訪れた子どもたちがいつでも新たな本と出合えるよう、貸出は行わず、館内での閲覧を原則とします。

2 利用方法

これまでにつくられた「こども本の森」は、9:30~17:00または17:30の開館時間が設定されています。これは、遅くまで勉強や調べものをする場所ではなく、日中に読書やその美しい空間を楽しむ場でもあるからです。

また利用にあたっては、一人ひとりが集中して本と向き合ってもらうための時間を過ごしてもらうことを踏まえた予約定員制や、予約不要の入館枠を設けるなど、開館後の状況に合わせた柔軟な運用を行っています。

本施設においてもこれらを参考に、主な利用者として想定する小中学生を中心とした子どもたちの利用を最優先としながら、その保護者や北大の学生・研究者、教

育関係者などにも施設に親しんでもらうことができるよう、開館時間や利用方法を検討していきます。

3 求められる人材・能力と運営手法

(1) 求められる人材や能力

本施設の特長を考慮し、運営においては以下のような人材や能力が求められます。

ア 独創性のある選書能力

「誘発機能」においては、利用者が新しい本と出会う機会を提案すること、多様なジャンルにわたる客観的な広い視野と、それを適切に分類する能力が必要となります。

本を手にとってもらうきっかけをつくるための分類を創造し、子どもを子ども扱いしない柔軟な観点や、新たな本との出会いを生む独創性ある選書により、棚を通して一冊一冊全ての本の魅力を利用者に伝える力が求められます。

イ 外部組織との調整能力

「交流機能」「体験機能」を実現するためには、多くの大学生に、準備段階から運営に参加してもらい、また、学生自身の研究や活動のフィールドとしても活用してもらうため、様々な場面で、大学や大学生と連携することが必要不可欠です。

また、市内図書館だけでなく、学校図書館との情報共有を活性化させることで、子どもたちの一番身近にある読書環境の向上に貢献するためには、市内図書館内での調整や推進力も必要となります。

本施設の運営においては、これらを進めるために、内外の多様な関係者に対し、円滑に交渉や調整を行える能力を有した人材が求められます。

ウ ホスピタリティの精神

子どもたちに本に出会うきっかけや、感動を与えるためには、人に感動を与えることそのものに喜びを見出し、追及していくことが必要となります。また、

子どもと接する上で、考え方やアイデアを肯定することや、一緒に伴走するなどの思いやりも必要です。それは日常的な利用者との接し方の一挙手一投足にも表現されている必要があります。

この場での本との思わぬ出会いを体験してもらうためには、「またここに来たい」と感じてもらえる接遇・対応が求められます。

エ デザイン及び広報のスキル

施設ロゴやサイン、グッズ、制服なども利用者とのコミュニケーションツールの一つであり、「(仮称) こども本の森」という施設を認識し、信頼感を高めるための要素です。本施設が掲げるコンセプトや意図を視覚的に伝達し、利用者へメッセージを伝える必要があります。そのためには、本施設全体の特別な価値やコンセプトをよく理解し、それに沿ったデザイン性の高いサインやチラシなどを制作できる創造力が必要となります。

デザインのスキルだけでなく、広報業務においては様々なメディアや SNS を活用し施設の魅力や特長を伝える情報発信能力、外部調整を行うための円滑なコミュニケーション能力、広報活動の戦略を検討する分析能力等も必要です。

(2) 運営手法

コンセプトやサービスの実現及び求められる人材・能力を踏まえ、運営手法を検討します。

本施設の特長を活かすためには、各々が主な担当業務を分担することで質の高いサービスを提供していく体制が望まれます。このことを前提として、直営の場合と民間の能力を活用した場合のメリット・デメリットを、表 2 のとおり整理します。

表 2 運営手法のメリット・デメリットの比較

	メリット	デメリット
直 営	・市の意図の運営への反映 …市の方針や目的が運営に直接取り入れられるため、市の意図が反映されやすく、市民のニーズに合わせたサービスや、市全体の政策と関連した方向を打ち出しやすい。 ・地域や学校との連携 …地域の生涯学習施設や学校との連携体制が構築しやすい。	・迅速性・柔軟性の問題 …民間事業者のように迅速かつ柔軟な対応が期待しにくい場合がある。特に新しいサービスの導入や運営方法の変更において、制約が多くなる可能性がある。 ・効率性の問題 …市職員が直接運営に関わるため、特定の専門知識や技術が必要な場合、効率的な業務運営が行われない可能性がある。
民 間	・民間企業のノウハウの活用 …民間企業の知識や技術等のノウハウを活用することで、効率的な運営や創意工夫が期待できる。 ・専門人材の柔軟な活用 …専門的な知識やスキルを持つスタッフを柔軟に配置できるため、効果的なサービス・運営が期待できる。	・運営のノウハウの非蓄積 …運営のノウハウが市に蓄積されない。また、運営者が変更となる可能性があることから、ノウハウが継承されない可能性がある。 ・地域の特性に合わない運営 …運営者が地域の特性を理解せず、適切なサービスを提供できない場合がある。

ア 直営の場合

直営の場合のメリットは、庁内調整等が円滑であることや、地域をよく知るサービスを実現できることが挙げられます。一方、本施設に求められるサービスの実現に当たっては、独創性のある選書・配架、高いホスピタリティ、広報・グッズ等の高いデザイン性が必要な業務等、様々な場面で習熟したスキルや知識が必要となりますが、このようなノウハウを持つ人材をどのように募り組織化するかに課題があります。場合によっては、業務の一部を外部に委託することも考えられます。

イ 民間の場合

民間の能力を活用した運営（指定管理者制度⁶）の場合、労務・総務・経理等の管理業務は、本社の管理部門等が支援することで、軽減されることが考えられます。また、独創性のある選書、高いホスピタリティ、広報・グッズ等の高いデザイン性が必要な業務について、それぞれの分野に特化したスキルとノウハウをもった、即戦力となる人材を、多種多様な業界から募り、柔軟に配置できる組織づくりを行えるメリットがあります。これらは結果的に、運営の効率化にもつながります。一方、直営の場合と比べ、地域に根差したサービスを実現できるかどうかや、ノウハウの継承等の課題があります。

上記の「ア 直営の場合」と「イ 民間の場合」におけるメリット・デメリットの比較を踏まえ、本施設の特長を活かし、コンセプトや求められるサービスを実現するため、民間の能力を活用した運営（指定管理者制度）を検討します。

ただし、事業者には、スキルやノウハウだけでなく、札幌市の地域性やこれまでの図書館運営に対する理解が求められます。その上で、本施設のコンセプトや役割を十分に把握しながら運営やサービスに反映し、本施設独自の価値を創出していける適切な事業者を選定することが重要です。

⁶ 指定管理者制度 普通地方公共団体が住民の福祉を増進する目的をもってその利用に供するための施設の管理を他の団体に行わせる仕組み。

4 開館準備

円滑に開館を迎えるため、選書、広報等が必要となる開館準備期間から十分な体制をつくる必要があります。

また、本施設の特長を踏まえ、開館準備に際して主に必要となるものを以下に記載します。

①本に係るもの

- ・ 収集方針及び独自テーマの作成
- ・ 選書・発注
- ・ 寄贈本の募集・受付・仕分け
- ・ 本の装備
- ・ 蔵書管理システムへの登録
- ・ 配架

②サービス計画に係るもの

- ・ 利用者向けサービス内容の検討
- ・ 開館後実施するイベントや「学びのプログラム」の企画・検討
- ・ 北海道大学や市立図書館・学校図書館との連携体制の調整・検討
- ・ 来館予約システム

③家具・備品に係るもの

- ・ 家具選定（建築に沿ったデザイン性の高いもの）
- ・ テーマ掲出のサインの作成や棚番号の考え方などの検討
- ・ 面陳用ブックスタンドの検討
- ・ 高書架における落下防止対策の検討

④広報、グッズ、デザインに係るもの

- ・ 施設名称の決定
- ・ ロゴ、ホームページ、サイン、制服、グッズ等のデザイン、制作の検討

⑤その他

- ・ 組織体制構築・研修計画
- ・ 名誉館長の決定
- ・ 開館時のセレモニーイベントの開催 など

5 寄附金の募集

三者での基本合意書において、本施設の開館及び運営等に要する費用については、寄附金によって賄えるよう、協力して募集することとしています。

本施設を将来にわたって、未来を担う子どもたちの学びと成長の場として運営していくため、ふるさと納税などの制度も活用し、広く寄附金を募集していきます。

第7章 施設諸元

1 名称

（仮称）こども本の森

札幌市図書館条例の改正を予定。

2 開館予定日

令和8年（2026年）夏頃

3 所在地

札幌市北区北8条西6丁目

北海道大学構内 南門付近



4 構造（予定）

鉄骨造 地上1階

5 延床面積（予定）

約 350 m²

第8章 今後のスケジュール

表3のとおり今後のスケジュールを想定します。令和8年夏頃の開館に向けて、各種準備を進めていきます。

表 3 開館までのスケジュール

	R6（2024）年度												R7（2025）年度												R8（2026）年度					
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	
安藤忠雄 建築研究所	基本設計・実施設計等												本体工事												外構工事					
札幌市													施設名 決定		寄贈本 募集															
	独自テーマの作成・配架計画の検討等												選書・図書購入												図書配架					
													寄附金募集（ふるさと納税等）																	
夏頃開館予定																														

参考資料

ヒアリング調査

(1) 施設利用者

ア 実施概要

本施設には様々な人が訪れることが予想されます。子どもだけでなく、中学生、高校生、大人も含めて、利用すると想定される人々に直接ヒアリングを行いました。このヒアリングでは、利用者の関心や、求める書籍／資料についての洞察を得て、今後の選書に活かせるよう、利用者の使い勝手や使い心地なども探求しました。

ヒアリング方法は、人と本（読者と著者）が1対1で向きあうという読書の特性から、参加者一人ひとりとの対話により、深い理解を得ることができる少人数のグループインタビュー形式としました。その場での追加質問やフォローアップを行うなど、柔軟な対応を行うことで、回答をより詳細に探究しました。

対象者	小学生4名、中学生4名、高校生5名 一般6名 計19名
日時	令和6年2月18日（日） ①13：00～13：45／②14：00～14：45／③17：00～18：00
場所	①・②STV北2条ビル教育委員会会議室／③札幌市図書・情報館
方法	グループインタビュー インタビュアー 幅允孝氏（有限会社BACH代表）
質問内容	・ 普段の読書傾向、読む本の種類、ジャンル、本との接し方 ・ 「（仮称）こども本の森」に期待すること ・ 自分が選書する立場だとしたら、どのような本を選ぶか など

イ 実施結果

	主な意見
普段の読書傾向	➤ 幼少期から絵本に親しみ、現在も引き続き本を読んでいる方、本が好きな方が多く参加。 ➤ 高校 3 年生は課題、進路や受験勉強など、学業との兼ねあいで読む時間が持てない様子。 ・ 読まないといけないと思いつつ、『エミール』やドストエフスキー作品などを少し読んではやめてしまう。(高校 2 年生) ・ メディアミックスされている作品は手をのばしやすい。(高校 2 年生) ・ 書店で買うより学校の図書室で借りて読む。目が悪くなりそうなためデジタルでは読まない。(中学 1 年生) ・ ソファで寝転がりながら読むのが好き。(小学 3 年生) ・ ネットで本を調べることもあるが、同じくらい書店のおすすめコーナーや店員のポップなどを見て買うこともある。(高校 2 年生) ・ 好きな著者やシリーズの本を読んで制覇している。(小学 5 年生) ・ 知らないことを知れる。絶対体験できないことをできるのが本の好きなこと。(一般) ・ 絵本の読み聞かせの活動をしているため絵本を読む機会が多い。(一般) ・ 子どもの時の方が読んでいた。何度も親が読み聞かせてくれた絵本は思い入れが強い。(一般) ・ 本が手元にないのは困る。常に何冊か併読し、読み進まないものは一度本棚に戻す。(一般) ・ 貸出上限を毎回持ち帰って読んで返してを繰り返している。(一般)

	主な意見
気になる本について、その理由	➤ 手にとりたくなるきっかけとして、タイトルの面白さ、表紙のビジュアルの良さが誘発点となる様子が顕著に見られた。 ・ 自然について視覚的に学べる本。(高校3年生) ・ 最近、映画を見て「なぜ人は戦争をするのか」と考え手に取った。(中学1年生) ・ 哲学を最近考えるようになり「死んだらどこへ行くのか、本当に自分がここにいるのか」と気になりタイトルから手に取った。(中学1年生) ・ 例えば恋愛小説などによく出るワード「好き」。当たり前を受け止めていたが、その1つ1つの言葉に不思議さを感じたため。(中学2年生) ・ サブタイトルが気になり、中身をパラパラめくると面白そうだった。(小学1年生) ・ 歴史が好き。他の人や知らない人を知ることができて面白い。(小学6年生) ・ 装丁に惹かれた。中身もすごそうだと思った。(高校2年生) ・ どんなところからでも読み進められる絵本は良い。(一般) ・ 写真集などビジュアルに優れた本が図書館にあればずっと図書館でいたいと思う。(一般)

	主な意見
こんな図書館になってほしい	・ 世界を旅するようにいろんな時代や世界感にぐっと入り込める図書館に。(高校3年生) ・ 歴史に学べる図書館。(小学6年生) ・ 手に入りにくい、金額の高い本も気軽に読めて興味が広がる図書館に。(高校3年生) ・ 個人で静かに読める場と、複数人で来て楽しく読む場があると良い。(中学2年生) ・ 自分が知らない世界、新しい視点を得られるようになると良い。(高校2年生) ・ ジャンルを横断的にすることで今まで興味を持ってなかったところを知れるように。(中学2年生) ・ 本棚に椅子がついている、小さい椅子が点在しているなど、気になる本を見つけたときにすぐ読めるように。(中学1年生) ・ 本のあるスペースと読むスペースが分かれているのではなく、境界を曖昧にしてほしい。次から次に色々な本を読むために。(高校2年生) ・ 中央図書館の Instagram のように SNS を通じて、コーナーのお知らせや本の紹介をしていくのもとても良い。(高校2年生) ・ 2、3歳くらいの子も楽しめるようにしてほしい。(小学2年生) ・ 寝っ転がってくつろげる、リラックスできるスペースがあると良い。(小学3年生) ・ 本が年齢で区切られていない図書館。(一般) ・ 靴が脱げる図書館。(一般) ・ 親も子どももそれぞれが集中して読めるような空間。(一般) ・ 広いところと自分の世界に没入できるスペースがあると良い。(一般) ・ 子どもがこっそり本を選んで読めるような図書館。(一般) ・ 北大は自然が多いので明るく自然光の入る場所。(一般)

(2) 施設関係者

ア 実施概要

本施設は寄附者、北海道大学、札幌市が同じ方向を目指して施設をつくりあげていくことが望めます。関係者となる北海道大学に施設への考え方などをヒアリングし、コンセプト検討や運営方針の検討に活かします。

さらに、準備段階や開館後は、様々な人に施設に関わっていただくことで、学びや活動が活性化していくことが期待されます。そのため、北海道大学の学生を対象にヒアリングを行い、利用者としての視点や施設への関わり方の可能性を探りました。

【大学関係者】

対象	行松泰弘理事、山本文彦理事、長谷川康弘副理事、 社会共創部社会連携課、附属図書館、学務課等 計 12 名
日時	令和6年2月19日(月) 8:45~10:00
方法	対面によるヒアリング
質問内容	・「(仮称) こども本の森」に対する考え、期待すること ・「(仮称) こども本の森」との連携について ・学生と「(仮称) こども本の森」の関わり方について ・産学官連携についての取組 など

【学生】

対象	北海道大学の学生 計 21 名 (3 グループ)
日時	令和6年2月19日(月) ①13:00~13:45/②14:00~14:45/③15:00~15:45
方法	グループインタビュー インタビュアー 幅允孝氏(有限会社 BACH 代表)
質問内容	・普段の読書傾向、読む本の種類、ジャンル、本との接し方 ・「(仮称) こども本の森」に期待すること ・準備や運営に携わっても良いと思う条件 ・自身の研究を子どもに伝えたとしたら、やってみたいか ・自分が選書する立場だとしたら、どのような本を選ぶか など

イ 実施結果（大学関係者）

主な意見

- ・ もしかすると唯一の大学の中の「こども本の森」になる。研究とともにグローバルな言語が飛び交うような雰囲気を味わえる場所になると良い。
- ・ キャンパスにはアイヌのコタンの古い遺跡が残っている。アイヌ文化や、北大の歴史的経緯を感じられるものを取り入れてほしい。
- ・ キャンパス内で施設がぽつんとあるのではなく、学内と色々な関係を持つ場所になってほしい。
- ・ 本の分類等も含め、大学のいろいろな学部と呼応していくと面白い。また学問は一つ一つの科目ごとに深く学べるので、特徴づけられる。
- ・ 入るのに敷居が高いイメージを持たれている。子どもが気軽に訪れることで「大学ってこういうところなんだ」と感じてもらえる機会にしたい。
- ・ 常時ではないが大学生も活用できる、職員も寄りたくなる、子どもを連れてきたくなるような、子どもと大学生が交流できるような仕掛けがほしい。
- ・ 自然があるので、屋外でのイベントや読み聞かせ、中と外との連動性があると良い。動物や昆虫の本を持って、学生や職員が分かりやすく教えるなど。
- ・ 学内の施設を活用すれば、色々なイベント等ができそうである。
- ・ 修学旅行生を受け入れる等があると良い。北海道は自治体数が非常に多いため、他自治体との連携という意味で利用者の広がりを期待している。
- ・ 小学生と博士課程は交流が生まれやすい。また、必ずしも大学院生から小学生に教えるというだけでなく、学びあいというコンセプトをもってほしい。逆に子どもたちが大学院生や大人に教えるという場で合っても良い。そのような場であると、社会価値としても高い場になる。
- ・ 学生の関わり方は有償、無償もあるが、やり方次第。大学生自身も学びになるため、主体的に学ぶ仕組みが重要になる。

ウ 実施結果（学生）

	主な意見
普段の読書傾向	➤ 子どもの頃から本に触れていた方、本や図書館に関わる仕事をしたことがあるという方も参加。研究関連本を読むことが多く、息抜きとして他のジャンルの本を読む傾向がある。 ➤ 子どもを持つ社会人の大学院生は、絵本に触れる機会も多い。 ・ デザイン系の研究室で、素材に関する本をよく読む。 ・ 同人誌や書籍を作っているので、今回のインタビューも興味があり参加した。 ・ 研究で人工知能系の専門書を読むことが多い。個人的には哲学の本も読む。 ・ 子どもの頃からずっと本を読んでおり、最近はある方の推薦図書を読む。大学図書館を使う。 ・ 子どもが2歳なので、絵本に触れることが多くなった。 ・ 研究に関する本を読むが、難しくて嫌になることが多いので、小説なども読む。 ・ 本というか文字が好き。田舎に住んでおり、中学生時代に図書館で勉強していたことが影響。

	主な意見
選書したい本について、その理由	➤ 子どもの年齢を気にせず、大人でも読める本を選ぶ傾向が見られた。また、大人が読んでも刺さるような絵本や児童書も選ばれた。 ・ THE 子ども向けの本というより、キャッチーで少し大人向けの本が入っていると良い。 ・ 写真が綺麗な本。自然なら帰り道に北大の中で見つけられる。 ・ 思いやりにあふれた、心がやさしくなる本。読み聞かせていて、自分が読んでいてもほっこりするもの。 ・ 自分が子どもの頃に読んだもの。大人になった今でも読みたいと感じる。 ・ 本は偶発と背伸びが大事だと思う。子どもも少し背伸びをすれば分かるものがある。 ・ 子どもがわくわく感を持てる本があると良い。大人向けや洋書でも、少し難しかったという印象を残し、大人になったときにまたその本に出会うことができる。 ・ 一般的な本屋さんに置いていない本があると良い。 ・ 偶然出会ったときに深く刺さる本。こういう生き方もあると気づくと、自分が自分ではめている枷に気付ける。

	主な意見
子ども本の森に期待すること	・ 大学生が普段使いできるようになっていると良い。 ・ 靴を脱げる、子どもとごろごろできるスペースが欲しい。 ・ 話を思い切りして良い図書館、おしゃべりできる図書館。 ・ 子どもがやってきて、自分一人で探しにいい、お母さんたちの目を気にせずに読めるなどが良い。 ・ 小さな頃から知識に触れ、成長して行き詰った時にも助けてくれることを知ってほしい。 ・ 受験で視野が狭まる前に、哲学など、教養について学べる、そういう教育が図書館にあると良い。 ・ 先端の技術を図書館で使うのも面白い。オフィスやヘルシンキなど図書館の中にマシン、3Dプリンターがあり、自由に使えるのは面白い環境。 ・ 発表できる場所。子どもたちが自分で絵本をつくる、それを飾ることができてフィードバックが来る。自分でものをつくる経験があり、誰かの手に取ってもらえる経験ができると良い。 ・ 本当に一人で読みたい本、読む行為そのものを楽しめる空間、落ち着いて一人でいられる場所があると良い。 ・ 自然豊かな場所で、セミやリスなどの生き物もいるので、活かせると良い。 ・ 中高生など、読みたい本が分からなくなる時期があると思う。自分もそういう経験があるので、そういう人に向けて好きな本が選べる場所になると良い。 ・ おとなしくできない子もいる。そういう子も過ごせる、音楽や映像をきっかけとして本の世界に入り集中する等の工夫があると良い。 ・ 外国にルーツを持つ子どもも多い。洋書をまとめて一箇所に置かずバラバラに置けば、子ども同士が触れあい、ことばの壁を超えられる。 ・ 自分の研究を伝えられる場になると良い。自身はハイブリットロケットの研究をしている、子どもたちにワクワクしてもらえるはず。 ・ 本を通して知ったことが、大学であればこの学部、学問になるんだよと伝えられる、その入口として図書館があると良い。 ・ 自然豊かな場所なので、活かせると良い。自然光が入ると良い。

	主な意見
学生の関わり方	・ 気軽にふらっと参加できると良い。参加のハードルが低い方が良い。 ・ ボランティアの方が良い。講師料が目的になると長くは続かないため、自発的にやってみたいとなるのが良い。 ・ 学内の実績としてオフィシャルに出せるメリットがあればやる。就職などにもアピールできる。 ・ 完成してからではなく、早い段階から接点がある方が関わりやすい。つくっている最中に関われると愛着も湧く。 ・ 公開授業を図書館でやる。その帰りがけに大学生に声をかければ、自然と交流できる。子どもにとって何を話しているか分からなくても、面白そうな大人がいる、と感じてもらえる。 ・ 図書館を研究のフィールドとして使えるとすれば、使いたい人はいるのではないか。実際的な研究の場にもなると思う。

(3) 先行施設

ア 実施概要

これまでの「こども本の森」に携わった方または現在携わっている方に、こども本の森としての機能や公共図書館との違い、立ち上げや運営に関すること、課題や教訓などをうかがいました。

対象	こども本の森（中之島、神戸）館長2名 こども本の森立ち上げ経験者2名
期間	令和6年1月24日（水）～1月25日（木）各1時間
方法	オンラインによるヒアリング
質問内容	・施設のアイデンティティや、通常の公共図書館との違い ・運営方針や、注力していること、気を付けていること ・運営において工夫していること、また課題など ・本の森の運営に必要な人材、スキル等 ・市立図書館や学校との連携について考えられる方法 ・これからできる本の森へのアドバイス など

イ 実施結果（先行施設）

主な意見

◆ 公共図書館との違い

- ・ 「こども本の森」としてのブランド力があること。90 分の予約制による特別感もその一つ。
- ・ 様々なジャンル（本）をテーマとした、自由なイベントが開催できること。

◆ 注力していること・課題

- ・ 平日の入館者数を上げること。子どもしか来てはダメだというイメージをどう払拭するか。平日にインバウンドも積極的に受け入れる、平日は学校の遠足をできるだけ受け入れることも行っている。

◆ 運営に求められるスキル

- ・ 本のことを知っているだけでなく子どもの相手ができ、総合的に面倒見が良い人。広報的な意味でデザインスキルがある人。サービス業に向けた人柄、ホスピタリティのある人。他大学、企業との連携を考えると、交渉能力もあると良い。グッズ等 VI をまとめるコーディネーターも必要。

◆ 学校連携

- ・ 団体貸出等は人員的に難しい。図書館法上の図書館ではなく、そうしたサービスを実施していないからこそ少数精鋭で運営できている。
- ・ 職業体験、遠足などは継続的に実施していく。障害をもったお子さんたちの学校の受け入れを強化していくべく、アプローチをしているところ。

◆ アドバイス

- ・ 「こども本の森」のブランド力を維持しながらの運営をしていけると良い。
- ・ 札幌市内の面白い会社や個人の方とコラボすると面白い施設になる。

◆ その他

- ・ インバウンド対応として接遇等の研修をしているが、特別に多言語に秀でたスタッフを雇用するということはない（ただし、英語が話せるスタッフは多い）。

ウ 実施結果（立ち上げ経験者）

主な意見

◆ 札幌市における特色

- ・ 気候や、自然に囲まれていること。大学という学び舎に、さらに小さな子どもの図書館があることは世界を見渡しても、施設構成的にもユニーク。
- ・ これまでの「こども本の森」は、子どもたちはインプット、受け入れることが中心。提供してもらったものを享受する。創造の循環ができれば、特色になる。

◆ これまでの課題・工夫

- ・ サインや什器など必要なことを抽出、予算配分も含めて明確にしておく。

◆ 準備・体制

- ・ 寄贈本（中にはモノも混じっている）の仕分け等でも人員・場所が必要。
- ・ 洋書はなかなか届かないので、早めに発注しておいた方がよい。

◆ スキル・採用

- ・ デザインに関連した視覚伝達におけるソフトが使える人がインハウスでいるのが大事。
- ・ 図書館経験が長い方だけでなく、別業界にいたが本は好きで詳しいという人も混ざっていると、健やかで風通しが良い。
- ・ ブランドの安定と向上のため、ブランド力を下げない人、ホスピタリティを理解している人。感動体験のある人。
- ・ 採用の時点でパブリシティを意識も重要。話題性が高まっている際に募集を行い、その際にロゴがきれいに見えると期待感も高まる。

◆ 市立図書館、学校図書館との連携

- ・ 本棚が変容していくので、本の森企画を他の図書館に提案するなど。
- ・ 興味がある人（意識の高い人）だけでなく、全ての子どもたちに届けるためには学校とつながることは重要。
- ・ 市立図書館がフォローすることで、来て楽しかった、で終わることなく、次は図書館に行ってみようとなる連携ができると本来の目的に近づく。市立図書館の利用者登録ができると、本を読むことの習慣化の創出になる。
- ・ 収容冊数が少ないため、本の森で除籍したものを使ってもらえると良い。
- ・ メディアの使い分けが難しくなっている時代、本の読み方は学校の教育現場では教えない。読むという行為の深度と道具が多様化する中で、紙のある本をわざわざある場所に行って読むとはどういうことかを伝えられる場所になると良い。そういう映像を撮影し、学校で流すなども良い。

◆ アドバイス

- ・ 来館者の方を向いて中身をつくっていくこと。
- ・ 他の本の森と競いあうのではなく、ファミリーとして見つつ、ならではのサイトスペシフィックな施設をつくることに注力すると良い。
- ・ 寄付金のことも考え、20～30年後にどうなるかの視点が必要。
- ・ 最初のミッションを一貫して持ち続けることは難しいが、持ち込み企画の選定などを考えても、本来の目的を忘れないことは重要なことになる。
- ・ 人の入れ替わりもある。良い人材を最初に採用し長く働いてもらうためにも、働けることのプライドや優秀な人へのフィーを上げることが重要。

◆ 「こども本の森」をつくる意義

- ・ 紙の本で読む行為とデジタルで読む行為は、脳の使い方も含めて違う（バイリテラシー）と言われている。両方の使い分けを考えただけで、未来向きの紙の本を集める図書館にしていく必要がある。
- ・ ネットでその場のことが分かった気になるが、実際体を運んで場所を体感する、五感総動員でその場所を感じるのは何よりも情報量が多い。図書館という場所はメディアである。
- ・ 図書館のライバルは、時間を奪っていく様々なもの。読むという特別な時間をどう作るかを促す必要がある。
- ・ いきなり「こども本の森」にきて誰もが楽しめるかと言えばそうではなく、それ以前の読書との出会いが重要。そういった素地がないと本の森に来ても持て余してしまう。来館には、保護者が読書好きかも関係する。
- ・ 子どもは環境を問わず皆平等で公平であるべきで、誰もが物語等の素晴らしさを享受すべきというのが最初の出発点（それはそもそも市立図書館の使命であるが、子どもは親に連れてこられないと来館できないので、学校連携がキーワードになる）。

(4) 有識者

ア 実施概要

本施設は大学の中にあることが特色であり、「学び」が重要なテーマとなります。さらに「学び」は本からだけでなく、人から学んだり、学びあったり、あるいは活動することで得られる学びもあります。そのため、「学び」や「活動（ものづくり）」を専門とし、業界で活躍する有識者に、そうした場をつくっていくためのヒントをいただきました。

対象 「学び」や「活動（ものづくり）」を専門とする有識者5組、計10名
(以下は実施順)

①中島さち子氏（㈱steAm 代表取締役）／鈴鹿剛氏（四国大学）

②北海道教育大学連携事業関係者（大日本印刷㈱）4名

③山内佑輔氏（VIVISTOP NITOBE）

④有山裕美子氏（滋賀文教短期大学）

⑤鎌倉てらこや（全国てらこやネットワーク）2名

期間 令和6年1月5日（金）～2月5日（月曜）各1時間

方法 対面またはオンラインによるヒアリング

質問内容

- ・ 普段の活動の中で大事にされていること、工夫、課題
- ・ 子どもとの学びやプログラムの実施、運営に適切な人材
- ・ 大学や学生との関わりについて
- ・ 運営に必要な機器、スペース
- ・ 施設の利点（大学内、自然の豊かさ）から考えられるプログラム
- ・ ものづくりと本との関わりの可能性 など

※当日の質問内容は有識者の専門により柔軟に変更しながらヒアリングを実施した。

イ 実施結果

	主な意見
① 中島さち子氏／鈴木剛氏	・ 図書館の役割が「知の受容だけでなく知の創造の場へも」と拡張されつつある。日本では静かに本を読むことが前提という雰囲気があるので、海外の事例のように「知る」と「作る」でゾーニングを分け、音が出て問題ないようなスペースも作ると良い。 ・ 場を回す「人」が重要。遊び場として、その場の空気感を醸成し、発想や創造のアイデアを引き出して伴走できるメンターを複数名養成し、常駐すると良い。研修や道具に予算を投じることも必要。 ・ イベント時に行くだけの場所ではなく、日常的な市民の遊びの場としていくと良い。一方で、さまざまな市民・子どもの創造性を引き出されるような、可変的なイベントが開催できる場や機会を持つと良い。 ・ 学生は、大学学内のバイトとして働き、子どもと一緒に自分の対人スキル育成やさまざまな学びにつなげられると良い。 ・ 大学における「伝え方」のままだと、一般にも子どもにも難しくなりすぎる傾向があるため、子どもがわくわくすることを中心におけるようなサポートの仕方ができる人材が大切。 ・ 研修で話を聞くだけではなく、自分たちがテーマを設定し何か問いや作品をつくる、さまざまな新しい道具も交えて遊ぶという経験が大切。それにより道具を本や大学の専門知と創造的に絡められる。 ・ メンターは、子どもに対して教えるのではなくアイデアを肯定し、引き出し、さまざまなことを一緒に楽しめるなど、伴走者としての役割や精神、資質が大事と考えられる。 ・ 遊びたくなる、新たな砂場のようなラフなイメージの道具の選び方、空間設計が良い。 ・ 空間、人、道具、活動の4要素（ハードとソフト）が有機的に絡みあうことが重要。場（空間）のあり方が人の創造性に影響を与える。 ・ ゆるやかに可変しながら様々なことができる空間が良い。本に絡めた遊び（多様な場や姿勢で読める空間も含め）もあると良いが、触覚を含めた五感を開くような、ハンズオンの創造の遊び場があると良い。

	主な意見
②大日本印刷株式会社 (教育大 STEAMers ラボ事業関係者)	・ 学習プログラムをマップとして用意すると、ステップが先に見え、「制覇したい」「次はこれをやりたい」と言いやすい。一方で内容が固定され、子どもが自由に発想を広げていくにはやりにくい。 ・ 家庭環境の特性や個人差を考慮すると、プログラムがあることは、共通のスキル獲得、基礎づくりには役に立つ。 ・ 自由にして良いといっても発想が浮かばない。3D プリンターなどは、サンプルがあると良い。 ・ おもちゃ屋さんの体験コーナーにならない工夫が必要。レゴを組み立てて遊ぶことが楽しくなってしまうではなく、プログラミング等、学びへのつなぎ方が必要。子どもたちが動き出すためのきっかけづくりをする人が必要。 ・ 運営に適しているのは、コミュニケーションスキルのある人。子どもが主体であるため、メンターは先生ではなく、正解を教えるのではない。子どもと一緒に調べても良いため、専門的な知識は問わない。
③山内佑輔氏	・ 子どもたちに教育プログラムを提供するのではなく、子どもたちをパートナーとしてともに事業（プロジェクト）を行う。ただし、短期で成果を出そうとせず、子どもとの共創は時間がかかるという覚悟を持つことが必要。 ・ 子どもだけが考えるのではなく、大人も共通のテンションがかかるテーマを設定するなど、いかに共同・共創できるか。大人の前向きな関わり方が必要。 ・ あまり事前に決めすぎると、制限されることもある（例：親不参加、口出し禁止とするかなど）。やってみなければ分からないことに対して、運営側の覚悟が必要。 ・ 「自分たちでつくること」。司書自身が、日常の仕事でどう機器を使えるかを考える必要がある。 ・ 子どもとの協働を考えると、「まずはやってみる」という精神が必要。大人（スタッフ等）が自分で手を動かしてみることができないと、その場の偶然性を受け入れるのが難しい。 ・ 対外的に分かりやすく見せて発信するには、取っ掛かりとしてプログラムがあった方が良い。そういう意味でパッケージも必要。両輪が良い。

	主な意見
④ 有山裕美子氏	・ 図書館で色々な情報や発想を得た後で、実際につくってみたり、触れる形でアウトプットできると、子どもたちの活動の可能性も広がるし、図書館として面白い。 ・ 「ものづくり」の機器やスペースが、誰でも触れられる場所にあり、可能な限り制限を設けず、自由に使えると良い。 ・ 認知も必要。図書館と「ものづくり」を結び付けていく接点を見つけ、関係者内の認知度を高めていくことで継続していこうという雰囲気につながる。 ・ 責任者を明確にしておき、いつでも使える状態にしておくこと。中・高校生のように生徒が自主的に活動できる仕組みをつくると、しばらくすると講師がいなくても良い状態がつかれることがあった。 ・ ライブラリーが姿を変えている中で、ライブラリアンも進化しなければならない。 ・ 図書館でやるイベントはハードルを下げて、参加しやすいプログラムを用意すると良い。簡単なことから始めて、本格的なことをやりたい子にはプログラミングの本を紹介したりすると良い。また、地域の課題解決につながるようなプログラムを実施するのも良いと思う。 ・ 大学構内に作るのであれば、大学生をうまく巻き込めると良い。ボランティアだけでなく、授業の中でも図書館と連携して一緒に何かできるのではないかな。
⑤ 鎌倉てらこや	・ 子ども一人ひとりと大学生の関わり、人間関係を大事にしている。 ・ 大学生と子どもたちが関わりながらやりたいことを一緒に探していくという活動スタイルで、先生や大学生が何か教え諭すという手法は取っていない。 ・ 研究への活用などは任意としており、学生たちの居場所にもなっていたり、子どもとの関わりに喜びや価値を感じたり、ミーティングによる学生同士の連帯が生まれたりする。学生たち自身の価値や魅力を学生自身が発見していく仕組みづくりが大事。 ・ 安全管理で、子どもが急に飛び出したりしないよう学生が常に傍にいて対応できる距離感を取っている。事故の予測は大事。 ・ 子どもたちを故意に傷つけないなど、大きなルールを学生と共有している。